

## 「メンデル家12人兄弟館の書」について(3)

坂本信太郎

### 1. はじめに

前回の文化特集号（早稲田商学第305号，昭和59年6月発行）に引き続いて，「メンデル家12人兄弟館の書」，第一巻，第一部，索引番号61（Amb. 317.2°，M-Bd. 1, 1 Nr., 61, Stadtbibliothek Nbg.）から，肖像画と，これに附されている，描かれた人物の経歴を紹介し，これについての若干の説明を記す。

付記。本稿は昭和59年度，早稲田大学商学部鹿野研究振興基金による成果の一部である。

### 2. 「メンデル家12人兄弟館の書」

#### 61. 大工

1437年，大工の Conrad Winkler 死す。126番目の兄弟。（1437年の作画）。

37（早稲田商学305号，p. 164, Fig. 41.）と同様の描写である。唯，馬（架台）の上に乗せてある角材はかすがいで留めてない。亦大工の締めているバンドに小さいカバンが下げられている点が異なっている。

#### 61v. 財団管理者

1438年，Peter Mendel 2世は，飲べの主日（3月23日）に12人兄弟館の管理者に就任する。1452年，聖ヴルンシェルの祝日後の土曜日（10月22日），

Petre Mendel II 死去す。彼は15年間管理者として務め、この間22人の館の兄弟達を送った。(1438年の作画)。

Peter Mendel II (管理者在任期間1438~52年) と彼の妻 (旧姓 Stromer) が、正面右側の祭壇の前に跪いて、数珠をつまぐりつつ祈りを捧げている。彼も彼の妻もそれぞれ毛皮で縁どりした、ゆったりした長上衣を着ている。彼の妻が被っているケープは当時流行の頭被いである。メンデル家の紋章とライヘンバッハのストローマ家の紋章が、2人の足もとに描かれている。

祭壇の平面は2段になっている。下の段の縁には色とりどりの房飾りが下がっている。そして上段正面の部分には、6人の聖者の彩色画が画かれている。その上段面にはきらきらと輝いている三折祭壇が置かれている。三折祭壇の中央部には、十字架上のキリストと、その頭上、雲にかこまれた天帝、そして左翼部には聖ペトロ、右翼部には聖ヨハネが画かれている。祭壇の左上方には永遠の灯が天井から吊り下げられている。そしてこの灯が燃えている容器は、メンデル家の小型の紋章を下げた豪華な飾り細工の吊環に支えられている。

## 62. 書記

## Fig. 65.

1438年, Johanes 死去。彼はもと裁判所の書記であった。次いで市や団体の書記となり、訴訟用の書類の作成にあたった。127番目の兄弟。(1438年の作画)。

書記は机面が傾斜している机に向い、腰掛けに座している。兄弟館の制服を着用し、後首まで垂れるターバン風の頭巾をかぶっている。羽根ペンで机上の帳簿に記入している。机上には鷲ペンとペンナイフ、そして赤色と黒色の小さいインクびんが置かれている。上げられた巻物状の書類も見える。机面の下、物入れになっている部分と、壁ぎわのベンチの上には、飾り鋏をつけ、鋏をしてある赤革装幀の部厚い冊子本がある。ブツェン・ガラスの入った両開き窓の傍の壁面には、インクびんと筆記用具の入ったケースが吊り下げられている。(153 v. の紙筒製造工の図参照)。

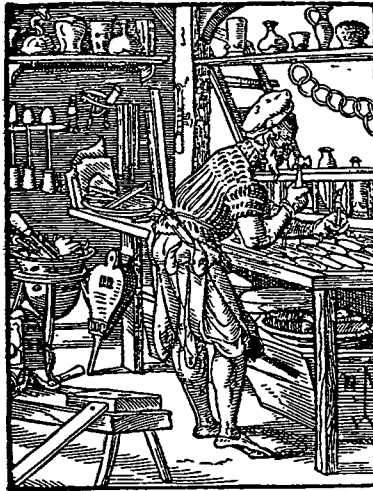


Fig. 65. 書記  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 62)  
(Stadtbibliothek Nbg.)

書籍・帳簿の形式には、皮紙を縫い合わせて細長い巻物にしたものと、皮紙を折りたたみ、綴じ合わせた冊子本（コデックス：Codex、2世紀頃に始まる）とがある。書記は今、巻物からコデックスに転写しているようだ。彼が仕事をしている部屋は筆記室と呼ばれている。「転写者のペンが過ちをしないように、誰でも筆記室では話をしてはならない」と、8世紀の詩人 Alcuin が言っているように、特に静かな部屋である。コデックスは重い皮紙や紙の頁がゆがんだり、波打ったりするのを防ぐ為、表と裏に革を被せた木の板の表紙がつけられ、更に小口の方を2本の帯と留金でしっかり留めるように装幀されている。亦書籍の収納法は、17世紀迄は、本を立てておくのではなく、横に平らに置いたので、表紙の中央や四隅に金属製飾り鉾を打ちつけて、本を傷めないように留意した。（早稲田商学302号，p. 174, Fig. 5, Fig. 6 参照）

筆記用具としては葦ペンと羽根ペンが、共に長い間使用されていた。鶯鳥、

## Der Glasser.



Ein Glasser war ich lange jar/  
 Gut Trinetgläser hab ich fürwar/  
 Beyde zu Bier vnd auch zu Wein/  
 Auch Venedisch glafscheiben rein/  
 In die Kirchen / vnd schönen Sal/  
 Auch rautengläser allzumal/  
 Wer der bedarff / thu hie einfern/  
 Der sol von mir gefährdet wern.

Fig. 66.

白鳥、ペリカンなどの羽根をペンとして用い始めたのは5世紀からである。羽根ペンは細く美しい字を書くことが出来るが、軟らかく、頻繁にナイフで削り尖らせていなければならず面倒であった。そこで自ずと、これに代わる用具が探し求められ、金属ペンが取り上げられたが、硬すぎて容易に用いられなかった。金属ペンが用いられるようになったのは、19世紀半ば、Perry という人によって、ペンの肩部と先端の間に開口をつけ、適当な弾力を持たせる改善がなされてからである。

13世紀以前の中世の建物には窓が無いが、有っても極く小さかった。そして窓は吹き抜けであった。外敵の侵入を防ぐために葦丈な枠や格子がはめられていた。亦風雨を防ぐために薄い羊皮紙や油紙が張られるといった程度であった。窓にガラスを用いることは、12世紀すでに教会では行われていたが、大変贅沢であった。個人住宅にも用いられるようになるのは、ようやく15世紀半ばを過ぎてからであった。図に見られるガラス窓は、ブツエン・ガラスで出来ている。ブツエン・ガラスは先ず、溶けたガラスを吹管の先につけ、吹いてふくらませ球状にする。次に、それをポンティルと称する細長い鉄棒の先に付けて吹管から切りはずす。そして急速に回転させて、球体を平たい円板に拡がらせて造られるのである。この小円板ガラスはポンティルの付いていた中心部が盛り上って疣状いぼ(ブツエン; Butzen) になっているのでブツエン・ガラス或いはクラウン (crown) ガラスと言うのである。この光度の強い厚くて小さい円板ガラスを一枚、一枚リボン状の鉛の枠にはめこみ、窓枠に入れて、半田づけして継ぎ合わせる。円板と円板の間の隙間には小さいガラス片を同様にはめこんで一枚の窓ガラスを形成するのである。(ヨースト・アマンの「職業の書」、ガラス屋の図 Fig. 66 参照)。

#### 62v. 皮なめし屋

#### Fig. 67

1440年、皮やの Schrepler 死す。128番目の兄弟。(1440年の作画)。

皮やは、完成品が重ねてならべられている陳列机のうしろの、長持兼用の腰掛けに座している。店内後の商品掛けにも拡げられた毛皮がある。

不安定な世情や禁欲的人生観などにより、中世の室内はどこでも極めて質素であった。家具や備品は種類も数も少なく、出来るだけ小型で、簡単に取りはずせ、持ち運びが容易なものが好まれた。このように乏しい家具の中で最も広く用いられた重要な家具は長持ち(櫃)であった。これは衣類や書籍類、商品等々の用品を入れる容器であると同時に、簡単に持ち運ぶことが出来るのでトランクの用も果した。亦図に見られるようにベンチに使ったり、ベッドやテー



Fig. 67. 皮なめし屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I. 62v.)



Fig. 68. 商人  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 63)

ブル代わりにも使ったのである。

### 63. 商人

### Fig. 68

1440年, 新親方 Peter 死す。商人であった。129番目の兄弟。(1440年の作画)。

商人は青色の細かい折目のついた, そして頭巾のようなカラーのある長い上衣を着ている。その上衣には毛皮の縁どりがなされている。商人は家のように見える建物の扉の前に立ち, 何やら右手で, 彼の前に置かれている商品の荷を指している。商品の荷は種々なやり方で緊縛されている。画面右側には2個所に取手をもった蓋のしてある樽がある。一時鳴りを静めていた商業も, 10世紀以後になると再び活力を回復してきた。そして西ヨーロッパには時を追って商人集団が多く見られるようになった。彼等は仲間同士で隊商を組み, 長老或いはハンザの伯と呼ぶ長を選んで, その指揮の下, 武装して, 商品の入った袋や



Fig. 69. 革帯作り  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 63v.)

柵，樽を積んだ荷馬車を護りながら，遠隔地を遍歴して商売に従事した。13世紀に入ると，これら遍歴商人に代って，都市に定住して帳簿をつけ，通信文書の交換によって商売を進め，亦委託取引を行う定住卸売商人連が出現するようになった。商人達が愈々盛大になってゆくに比して，経済的に次第に追つめられてゆく貴族・領主達は，ねたみ・ひがみと軽蔑を交じえて，商人達を「胡椒袋」と呼んだ。

#### 63v. 革帯作り

#### Fig. 69

1441年，革帯作りの Herman Paumgartdener 死す。130番目の兄弟。(1441年の作画)。

重々しく垂れ下がった僧帽のついた兄弟館の制服のベルト作りは，変った形の金敷の前に座している。既にバックルのついている革帯に鳩目の穴をポンチで打っている。作業台の上と，壁上の桿には完成した品が並べてある。

**64. 水筒作り**

1442年、水筒作りの Heincz Sebacher 死す。131番目の兄弟。(1442年の作画)。

壁上の桿にかけてある完成品の水筒のうちの一個に紋章が画かれている。色彩がほどこされていないのでよく分らないが、メンデル家のもと思われる。

32, 43 v., 57 (早稲田商学305号, p. 158, p. 174; Fig. 49, p. 186) 参照。

**64v. 梳毛工**

1442年、梳毛工の Kuncz 死す。132番目の兄弟。(1442年の作画)。

28 v. (早稲田商学302号, p. 199, Fig. 33) の模写。

**65. 家令兼酒蔵室長****Fig. 70**

1443年、年老いた Ott 死す。彼は12人兄弟館の創設者の僕を勤めていたが、43年、家令兼酒蔵室長を辞して、12人兄弟館の一員になった。133番目の兄弟。



**Fig. 70.** 家令兼酒蔵室長  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 65)



(1443年の作画)。

曾て Konrad Mendel (1414年死亡) の僕であったこの家令兼酒蔵室長は兄弟館の灰色のマントを着て、同色の丸い広縁の帽子をかぶっている。ベルトには大きな鍵が3個も下がっている。その鍵のうちの1個を左側に置いてある立派な戸棚の鍵穴に差し込んでいる。戸棚には三弁花の模様が彫刻してある特別な頭飾りがあり、正面上部の板面にはメンデル家の紋章が色彩鮮やかに画かれている。亦その台座の部分は弓形に切り込んである。家令は、もう一方の手で開いてある、台座のついた長持ちを指さしている。長持の中には、数個のパンの塊と、壺そして蓋をした木桶が各々1個入っている。

#### 65v. 木挽

1443年, 134番目の兄弟, Cuncz Prendel 死す。彼は木挽であった。もの静かな人物であった。(1443年の作画)。

1. (早稲田商学302号, p. 176, Fig. 7) 及び 39. (同誌305号, p. 168) の模写である。

#### 66. らしゃ小売商人

1443年, らしゃ小売人 Cuncz Dorenberger 死す。135番目の兄弟。もの静かな人物であった。(1443年の作画)。

らしゃ小売商人は商品陳列台のうしろに立って、布地の長さを物指で計っている。陳列台には種々な色の反物が重ねてある。反物の上にはばね式のはさみが1丁置かれている。台の下部の2つに区切られた物入れの中、及び天井から吊り下げられている棹には、種々な幅の、種々な色合の、種々な商標の布地が見られる。

#### 66v. 指物師

1444年, 聖ペトロ, アンチオキアに教座を定めた記念日の後の水曜日(2月26日), Peter Sreiner 死す。136番目の兄弟。もの静かな人物であった。(1444年の作画)。

大きな戸棚の中段棚板に鉤をかけている。この戸棚の台座は弓形の刻みで飾られ、その頭部は、はざま胸壁様式の豪華な頭飾りで飾られている。頭飾りの壁帯部分には、三弁花や四弁花を種々に組合せた模様を、透かし彫りしたゴシック式円花窓の彫刻が相接して施されている。戸棚の前扉はまだ着装されていない。戸棚の前に置かれている小型の櫃には、これ亦、まだ蓋がついていない。その台座には三葉形の飾りがある。仕事台には楔で留めてある板と、のみ、木槌があり、壁には左右に握り柄のあるおさのこが掛っている。

### 67. 大工

### Fig. 71

1446年、大工の Heinrich Meyr 親方死す。聖アントニウスの祝日後の金曜日（1月18日）であった。137番目の兄弟。誠実な人物であった。（1446年の作画）。

大工は今、建築用の格子組（トラス）を組み上げている。あらかじめ、地面の上で組み上げ横たえておいたトラスの角材に、筋交い板をあてて、大きな両



Fig. 71. 大工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 67)

手握の錐で柄穴をあけている。この穴に楔を打ち込んで、各々の角材部分をしっかりと固定するのである。組まれた角材の上には2丁の幅広の大工用手斧とのみが1本見える。

#### 67v. 仕立屋

1446年、聖ラウレンチウスの祝日の8日前(8月4日)、仕立屋の親方 Hans Frumann 死す。138番目の兄弟。もの静かな人物であった。(1446年の作画)。

3本脚の腰かけに座し、壁から突き出ているフックから吊り下げられている長上衣の毛皮の裏の飾り縁を縫っている。右側背後の壁には袖無しの、ウエストをしばった服が下げられている。仕事台には物指とラシャ鋏が置いてある。

#### 68. 短剣作り

1447年、シモンとユダの日(10月28日)に死す。姓は Schreder (名前のあるべき箇所は空白である)、短剣作りである。139番目の兄弟。もの静かな男である。(1447年の作画)。

ナイフを押し当てて固定し、工作する為の特別な柱(万力)を備えた仕事台の傍で、柄が取りつけられているナイフの峯の部分にヤスリをかけている。出来上ったナイフ・短剣のうち、1本のナイフと短剣は仕事台に突き立ててある。12 v. (早稲田商学302号, p. 186, Fig. 19) 参照。

#### 68v. 靴屋

1447年、靴やの Vlrich, 枝の主日(4月2日)に死す。140番目の兄弟。もの静かな人物であった。(1447年の作画)。

仕事機のうしろの丸い腰掛けに座して、尖がり靴の片方を木型に合わせている。半月形裁断包丁が机につきさしてある。仕事部屋は丸弓形の入口に面しており、入口の、左下の部分、表通りに面して、小さな陳列棚が押し開かれている。その上に出来上った2足の靴が並べられている。陳列棚の長さは短かいので、入口の右端は空いていて店内への通路になっている。店内の壁の棧には靴

木型 2 足分が挿し込んである。

### 69. 靴屋

1447年、靴やの Hans GelderBheimer, 復活祭後の最初の日曜日（4月16日）に死す。141番目の兄弟。（1447年の作画）。

仕事場で縫針を手に、靴を縫っている図である。

### 69v. 商用飛脚人

1448年、商人達の使い走りをしてしたが、その後飛脚を辞して時鐘係になった Heincz Wammusser, 聖霊降臨祭週の木曜日（5月14日）に死す。142番目の兄弟。もの静かな人物であった。（1448年の作画）。

16 v. （早稲田商学302号, p. 189, Fig. 24）と同一構図の飛脚の図である。しかし、私用の飛脚であるので市の紋章はどこにもつけていない。

### 70. 蹄鉄鍛冶屋

紙面毀損の為、記事部欠落。（1448年の作画）。

52. （早稲田商学305号, p. 183, Fig. 57）の模写。

### 70v. 石工

紙面毀損の為、記事部欠落。（1448年の作画）。

石工は 1 本脚の腰掛けに座して、石面をつるはしで加工している。曲尺と水準器とが未加工の石の傍に置かれている。

### 71. らしゃ小売商人

1450年、四旬節の中のレダーレ週の金曜日（3月20日）、らしゃ商人 Hans Hoppinger 死す。145番目の兄弟。誠実な人物。（1450年の作画）。

丸弓形の小さい切り込みのある台座の、背の低い商品台の傍で、らしゃ商人が物指で布地を計って小売りしている。台の上には色とりどりの反物がある。

### 71v. 屠殺人

**Fig. 72**

1450年、屠殺場の屠殺人である肉屋の Ott Plessel, 聖フランスシの祝日後の水曜日（10月7日）に死す。146番目の兄弟。もの静かな人物であった。（1450



Fig. 72. 屠殺人  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 71v.)

年の作画)。

屠殺人は屠畜の左側に立ち、柄の短い手斧を振り上げている。助手が屠畜の頸をしっかりとおさえている。助手は赤革のすね当をし、赤色の立襟カラーの青色ジャケットを着ている。そしてジャケットの上に革帯を締めている。屠殺人は頭巾のある兄弟館の制服を着、仕事の邪魔にならないように長い頭巾の下端をベルトの間にはさみこんでいる。

屠殺者の振り上げている手斧は反対向きになっているが、これは斧頭の峯で屠畜の前頭部に打撃を与え、先づ意識を失わせる為である。そして次の処置が進められてゆくのである。この当時、すでに屠殺に関し厳しい規定があった。生後四週間以内の未熟獣の屠殺、片目、片足等の傷害や腫物のあるものの屠殺は禁止されていた。亦屠殺後、その肉は2日間のみ販売が許可されていた。そして親方は市の定めた公衆浴場へ職人や徒弟をやらなければならなかった。

## 72. 日傭のモルタルこね

1450年、聖ガレンの金曜日（10月16日）に Fricz Snebeys 死す。彼は日傭人であり、40年以上も当市のモルタルこねの手間仕事に従事していた。147番目の兄弟。誠実な男であった。（1450年の作画）。

36（早稲田商学305号，p. 164）を左右逆にした図で，この図ではモルタルこねの箱の前にすべり止めの杭が打ちこんでない。

## 72v. 錠前金具作り

## Fig. 73

1451年、カーニヴァルの前の月曜日（3月8日），錠金具やの Hans Schelhamer 死す。148番目の兄弟。もの静かな人物であった。（1451年の作画）。

錠金具やは豪華な装飾が施こされている錠前の金具をハンマーで加工している。仕事台には1枚の未加工の金具板と3本の鍵，そして各種の道具がちらばっている。右側には金敷，背後には燃えさかっている鍛冶炉と長いヤットコが



Fig. 73. 錠前金具作り  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 72v.)

ある。

### 73. 車大工

Fig. 74

1451年、車大工の Hul の Ulrich 親方、聖ミカエルの日の前の水曜日（9月22日）に死す。149番目の兄弟。善良な人物であった。（1451年の作画）。

10 v., 26 v., 51 v.（早稲田商学302号, p. 184, p. 197, 305号 ; p. 182）の図を敷衍した図である。

兄弟館の制服の上に長い革の前掛けをしてしている。作業場の床上、左側には切り株に3本脚をつけた腰掛と、組み上げる前の車輪の一部が置かれており、右側には種々な道具類、手斧、車輪のこしき（車輪の中心部でスポークをさし込む部分。こゝに車軸が通る。）にスポークをはめ込む穴あけ用錐、車輪の外縁やスポークの円形部を削る為の両柄の特別な削り道具、<sup>ネン</sup>錐が置かれている。錐は日本でも古くから使用されている削り道具で、両柄を握って使うので力が入り、能率よく広い面を平らに削ることが出来る。亦、丸棒や車輪の曲面部を削



Fig. 74. 車大工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 73)



Abziehen eines Werkstücks, 18. Jahrhundert  
Der beidhändig geführte Ziehklingenhobel dient der  
feinen Oberflächenglättung  
aus: A.J. Roubo, Bd. IV, Taf. 350

Fig. 75. 錐の使用図

るに極めて適している道具である。

### 73v. 財団管理人

1452年、11万人のおとめ祝別日の後の金曜日（10月27日）、Peter Mendel 一世の孫の Peter Mendel 三世は、12人兄弟館の管理者となる。同時にカルトジオ修道院の管理者にも就任する。1473年、聖母マリア訪問祭の日（7月2日）、Peter Mendel III 死す。彼は21年間にわたり管理者を務めた。この間37人の館の兄弟を送り葬った。更に彼の死後の14日間に38人の兄弟達が死んだので、市の決議によって、急遽新しい管理者が任命されることとなった。

毛皮の縁飾りのある長上衣を着用した管理者 Peter Mendel III（就任期間、1452～73、死亡年1473）とボンネットを被った彼の夫人 Apollonia, 旧姓 Waldstromer が祭壇の前に跪いている。各々の足許にはメンデル家及び Waldstromer 家の紋章が画かれている。祭壇の上段面は縞模様染め分けてある房のついた敷物で覆われている。その上にある三折祭壇屏風（ぼかした薄褐色になっている）には三聖人の像が画かれている。そしてこの衝立はゴシック様式の小尖塔に作られた支柱で支えられており、更に中央部上辺はゴシック式花模様と三弁花の装飾のあるアーチで飾られている。

### 74. 傭兵

### Fig. 76

1452年、救世主御公現の日の後の水曜日（1月12日）、Cunrat Kelner 死す。彼はほぼ45年間を傭兵として過した。150番目の兄弟。（1452年の作画）。

手綱のある白馬に乗り、槍を肩にかついだ傭兵が、生い茂った緑の草原を左の方へ進んで行く。図中彼は兄弟館の制服を着ている。そして鉄板製の帽子を顔まで真深にかぶっている。迫車の付いた長靴をはいている。

14世紀以来、騎士階級はゆっくりと没落してゆき、それまでのように戦かいの中心になることはなくなった。そして戦争が次第に日常化してゆくにつれ、経済的な職業的な傭兵に代っていったのである。傭兵の武器は各自が調べた。最も一般的で重要な武器は、柄が6mほどの長槍と、2mほどの矛槍であっ





Fig. 76. 傭兵  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 74)

た。矛槍は鉄の穂先の1方の側に斧が、反対側に騎上の兵士をひきずり落す為の鉤がついている槍である。すぐれた武器を持つほど給料は良かった。歩兵の場合、毎月6～10グルデン、騎兵の場合、平均15グルデンであった。これは腕の良い職人の賃金より良かった。指揮官になると500～3000グルデンも貰った。(註：グルデン、銀貨の名称で、約2マルクに当る。)

当時は身分による衣服規定が大変厳しい時代であったが、傭兵達はこれを無視して、贅沢な、奇抜で華美な服装を競った。こうした状態に「彼等は不幸でみじめな生活を送り、四六時中死を覚悟していなければならないのだから、その代償として少しばかりの喜びと楽しみを認めてやってほしい」とマクシミリアン皇帝は弁解している。

#### 74v. 仕立屋

1452年、復活祭の休みの日(4月12日)、AurbachのUlrich死す。彼は仕立屋で151番目の兄弟である。(1452年の作画)。

仕立屋は支脚が豪華な造りの仕事机に向い、ラジャ鉄で反物を切り分けている。天井から下がっている桿には、毛皮の縁飾りのある、ゆったりした長上衣が吊るしてある。亦裁断済みの生地が掛けてある。透視図法に従って床タイルを描き、室内の奥深さを示そうとした図である。

### 75. 香辛料商人

### Fig. 77

1453年、スラブ人だと言われた香辛料商人の Perchtolt Kromer, 聖霊降臨祭の前の月曜日（5月14日）に死す。152番目の兄弟。（1453年の作画）。

香辛料商人が商品を入れてきた樽の上に置いた板を陳列台にして、小型の携帯用天秤で商品を計り分けている。陳列台にはいくつもの小さい麻袋が口を押し上げられて並べられている。その中には、赤、茶、黒色の棒状や粒状をした種々の香辛料が入っている。通りのうしろには相接して赤い波形瓦の2階建の家が2軒ある。右側の破風はのこぎり壁につくられている。

中世ヨーロッパ人は非常に香辛料を珍重した。それは肉を料理する際、その



Fig. 77. 香辛料商人  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 75)

臭みを消すのに必要であったし、手のこんだ料理のスープ用調味料として欠かすことの出来ないものだったからである。更には活力を与える働きがあるので、万病に効く薬剤としても考えられていたからである。昔からよく用いられていた香辛料は、にんにくとからしであったが、十字軍の遠征以来、胡椒、生姜、肉桂、ニクズク、丁字、バンウコンなど各種のものが豊富に東洋から舶来されるようになった。しかしこれらのものは大変高価な貴重品であったので、13世紀以前では国王、貴族・領主、富豪のみしか入手出来ないものであった。修道院では香辛料は媚薬であると目していたのでその使用を避けていた。その為修道院の料理はまずいという定評であった。

## 75v. 帽子屋

## Fig. 78

1454年、帽子や Ulrich Goczseygert 死す。153番目の兄弟。(1454年の作画)。

3段に分けした帽子掛けが壁の高い処にかけてある。種々な色の毛製の帽



Fig. 78. 帽子屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 75v.)

子が掛けてある。帽子やが手にしている棒は帽子掛けから帽子を取り降ろすための用具である。

帽子の起源は古く、古代エジプトやギリシャの時代から見られている。防暑、防寒、防砂及び戦闘防御用として頭を保護するという実用性と同時に、階級の象徴でもあった。図の帽子はクロッシェ型の帽子である。釣鐘型といわれるように、クラウン(頭にかぶる部分)が深く、ブリム(つば)がさがっている。この型の帽子はキリスト教初期にすでに見られる。この他、ボレロ型の大型の帽子が15世紀に、亦、はなやかな飾りをつけたキャプリン型が16世紀に現われている。

## 76. 大工

1454年、大工の Rudolf Meir, 聖ロレンツの日の後の火曜日(8月13日)に死す。154番目の兄弟。(1454年の作画)。

大工がまっすぐに組上げられた木骨家屋の角柱の前で、右手に握った手斧を振り上げて作業している。足下の地面には大きな斧と両手錐が置かれている。

## 76v. パン屋

1455年、元旦の後の木曜日(1月2日)、パンやの Jakob Deygel 死す。155番目の兄弟。(1455年の作画)。

パン焼き職人がパン焼窯の左側から、長い柄の木製シャベルを窯の中に差しこみ、パンを取り出そうとして、中の工合を窺っている。弓形に開いている窯の口から、狐色に焼けたパンの塊がいくつか見える。この開口部中央すぐ上部に、小さい四角形の通風用孔があいている。パン焼き窯は、ゆるい傾斜の一寸変った寄棟屋根で覆われている。屋根のすぐ下の部分には、突き出した、上に反った樋のような溝がついている。窯の前の地面には、窯からかき出した灰や炭の山がある。

## 77. 舗装工

## Fig. 79

1456年、聖母マリア御潔めの祝日前の木曜日(1月29日)、舗装工の Heinrich 親方死す。156番目の兄弟。(1456年の作画)。



Fig. 79. 舗装工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 77)

ドイツの都市では12世紀まで舗装道路はなかったが、リュベックで1310年、ベルリン及びフランクフルト・アム・マインで1339年、ニュルンベルクでは1368年から舗装されるようになった。初めの頃は碎石がよく用いられたが、次第に石板や煉瓦が用いられるようになった。舗装工事人が一部分掘り返されている舗装道路の上に、一本脚の腰掛けに座して仕事をしている。作業用の小さいハンマーの柄で舗面に今敷いた丸石片を軽く叩いて凹凸のないようにしている。一本脚の床几は作業に従って工事人と一緒に直ぐ移動出来るよう、紐で腰にくくられていて、作業中常時舗装工の尻面に付いているのである。ドイツの舗装工は有名なこの一本脚床几を用いて舗装しながら後方に移動してゆくのに対し、フランスやフランドルでは四本脚の小腰掛で前の方に移動したものらしい。敷石の下の路面を掘り下げたり、敷石を打ち込むのにはハンマーを用い、コテは敷石の下面や合せ目に砂を詰め込むのに用いる。

図の背後の瓦ぶき切妻屋根の二軒の家のうち、左側の家はのこぎり壁の破風

で、軒下は波形模様で飾られている。そして幅のせまい支柱で2つに仕切られている窓がある。窓にはゴシック様式の豪華な飾りがあり、背が高い。窓用ガラスに継ぎ合わせた小さいガラスしか使用出来なかった当時、窓の大きさは自ずと限界が生じた。限界を越えた大きい窓が欲しい時には、その一つの窓の間に、幅のせまい支柱を入れ、二つの小さい窓を並べるという図のような様式が考案されたのである。

道路舗装の歴史に関しては下記文献参照

Johann Beckmann, *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen*. Bd. 2. Leipzig 1788. S. 335~364.

ヨハン・ベックマン；特許庁内技術史研究会訳。西洋事物起源，Ⅱ，ダイヤモンド社，昭和57年6月，p. 418~431.

F. M. Feldhaus, *Die Technik der Vorzeit, der geschichtlichen Zeit und der Naturvölker*. Leipzig 1914. Sp. 1088-1089.

#### 77v. 日傭取り

#### Fig. 80

1456年，聖ゲオルギウスの祝日前の水曜日，Hans Pheuffer 死す。彼は長い間道路の溝さらいの仕事に当たっていた。157番目の兄弟。(1456年の作画)。

はざま胸壁を備へ、扶壁のある市の外壁の溝のわきで、日傭人がシャベルで汚物をさらっている。その背後には、銃眼と軒蛇腹のある瓦屋根の円形塔が二つ並び、その間にはさまって第二の城壁が見える。

中世の街路はごみや汚物を路上に放置したり、夜間ひそかに持ち出し亦二階の窓から投げ棄てたりする不心得者が多くて、ひどくきたくない場合が多かった。原則としては各人が自分の家の前を責任を持って掃除しなくてはならなかったが、守られることはなかった。実際に清掃に当たったのは掃除人夫である。人夫はそれぞれ受け持ち区の塵芥・汚物を収集して廻り、汚物車や舟に積んで市外に運び出した。この人夫の給料や清掃費用は区内の住民が負担したのである。公共の事業として公費によって清掃が行われるようになるのは中世も終り



Fig. 80. 日傭取り  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 77v.)



Fig. 81. 拍車作り  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 78)

の頃で、ニュルンベルクでは1490年からである。

### 78. 拍車作り

### Fig. 81

1457年、聖ガレンの祝日前の日曜日（10月9日）、拍車作りの Enderes 死す。158番目の兄弟。もの静かな人物であった。（1457年の作画）。

陳列台を前にした窓ぎわの仕事台に向い、拍車作りは半身を覗かせて、花車（小歯車）のついた拍車の取付金具を打ちつけている。立派な飾り金具の蝶番のついた陳列台は外側に開くようになっている落し戸である。戸の裏側中央についでいる棒で支えられている。幅広い窓枠を用いた仕事台には異った形の小さい金敷が2個、一つは長い角のある卓上型で他は平面箱型が置かれている。その間にヤスリが1本ころがっている。拍車は鉄で作られ、時には錫メッキが施される。拍車作りは拍車の外に、馬銜（くつわの口中に入る部分）の支え棒、<sup>アブミ</sup> 鑑、馬の鉄櫛も作る。

拍車は人間が馬を安全・自由に操縦する為の必要な制御道具の一つである。股で馬体を締めつけたり、手綱を操ったりするのと同じ様に、向きを変える際に馬の腹部を刺激して御する道具である。亦、馬に懲罰を加える時にも使われる。靴の踵に止め革や止鎖、或いはねじで取りつけられる。

最も古い型式の拍車は一端がとがった短い棒を踵にとりつけた尖刺拍車で、前4世紀にケルト人に使用されていたと言う。東洋ではスキタイ人が前5世紀にやはり知っていたと言う。13世紀に入って尖刺拍車に代って花車を具えた柄の長い型のものが作り出されたのである。

拍車の歴史に関しては下記文献参照

A history of technology. Vol. 2. Oxford 1956, S. 556~559.

技術の歴史, (4), p. 492, 筑摩書房, 昭和38年2月

Lynn White jr, Medieval technology and social change. Oxford 1962. S. 150.

78v. 紡糸用糸巻き棒作り

Fig. 82

1457年、糸巻き棒作りの Werenlein Reinmon, ガリーの後の月曜日（10月17日）死す。159番目の兄弟。（1457年の作画）。

糸巻き棒作りが大きな切株の台に据えた角棒を手斧で削っている。左後方に十字形台座の長い糸巻き棒が立ててあり、右側には紡いだ糸を巻きとる糸巻き車、そして前方左には薄板を編んで作った糸玉入れバスケット、その傍には紡がれた糸を織機に掛ける前に洗濯する時の叩き板が2個ある。

絹繊維のように始めから連続した糸になっていない綿や羊毛のような短い繊維は、ひき伸して撚り合わせ一本の長い糸にする紡績作業を必要とする。初めは手撚りで行っていたが、紡錘車のついた短い棒が用いられるようになり、紡績作業は大発展をした。次いでこの作業に短かい手持ちの糸巻き棒が加えられた。繊維をあらかじめ粗糸にして手持ち糸巻き棒に巻きつけておき、こゝから紡錘に繊維をひき出してゆくのである。ローマ時代初期になると長い糸巻き棒





Fig. 82. 紡糸用糸巻き棒作り  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 78v.)

が代って登場した。長い棒の先端につけられたV字形の刻み目に繊維を支えるの環や枠で付けておき、ここから紡錘にひき出すのである。この方法は一見したところ直接繊維から紡ぐという最初に復するだけのように見えるが、大変な改革を含んでいた。長い糸巻き棒はその一端を帯の間に挿し込み、棒の中辺を腕にかまえて充分に安定して支えることが出来るし、亦しっかりした台座に据えることも出来るので、両手が自由になり、片手で繊維を引き伸ばしながらもう一方の手で強く紡錘を回転させることが出来る。従って極めて細い、強靱で均質な紡ぎ糸を得ることが出来るようになった。13世紀になって機械化された紡錘車が出現する迄好んで使用された。

ニュルンベルク市ゲルマン博物館所蔵の1400年代の板絵「子供といるマリアとエリザベス」の図に、長い糸巻き棒と糸巻き車の図が画かれている。(Germanische Nationalmuseum Nürnberg. Raum 13. Nr. 159. 同博物館

カタログ, 展示品番号159. p. 159)

春の使者, 聖ゲルトルートがやって来る日(3月17日)には「ねずみをつれたゲルトルートが紡ぎ女達を部屋から追い出す」と言われている。長い冬が終り春がやってくると, 部屋にこもって行っていた糸紡ぎ仕事もこの日に終り, 亦, 終らねばならないのだった。

### 79. 石工

1457年, 11月16日, 石工 Hans Scheurer 死す。160番目の兄弟。(1457年の作画)。

### 79v. 真鍮細工師

### Fig. 83

1458年, 聖母マリア昇天祭の前の金曜日の夜(8月11日), 真鍮細工師の Kuncz Franck 死す。161番目の兄弟。(1458年の作画)。

弓形の縁枠入口の奥の仕事場で, 真鍮細工人は铸造された真鍮燭台の柱にヤ



Fig. 83. 真鍮細工師  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 79v.)

スリをかけ美しく磨いている。仕事机には2本の蠟燭を灯す二腕の燭台が2個と取手のある真鍮製コップ1個、そして豪華な聖体顕示用容器が置いてある。天井近くの梁に設けた棚には、5枚の大小さまざまな真鍮製深皿が整然と陳列してある。真鍮細工師達は16世紀初頭頃までは金細工品と紛うような、そして芸術的製品の生産に特に力を入れていた。1400年頃ニュルンベルクで新しい真鍮加工、真鍮鑄造の技法が開花し、100年後にはその繁栄は絶頂に達した。その技術はドイツの中でも抜きん出ている。

下記文献参照

W. Fries, Das Nürnberger Kupferschmiedehandwerk. Kultur des Handwerks. München 1926/27. S. 120~123.

#### 80. 靴屋

1459年、靴やの Martin Swob, 聖マルチン祭前の水曜日(1月7日)死す。162番目の兄弟。(1459年度の作画)。

靴やは半月型包丁で革を裁断している。

#### 80v. パン屋

1460年、パン屋の Heincz Dittenhoffer, シモンとユダの祝日前の木曜日に死す。163番目の兄弟。(1460年の作画)。

小さな通風孔のある窯に、尖頭形の生パンを木製シャベルに載せて差し込むとしている。窯の中には巻パン等の生パンが見える。

#### 81. 真鍮板展伸工

Fig. 84

1462年、聖バレンタインの祝日前の土曜日(2月13日)、真鍮板叩きの Kuncz Hirsfogel 死す。164番目の兄弟。(1462年の作画)。

三方が壁面で囲まれている構内で、真鍮板展伸工が石材に腰かけ、四角な断面の鎚で細長い真鍮板を真直ぐに叩き伸ばしている。細長い板の上に置かれた鉄のブロックの特別な金敷が用いられている。うしろに縛って巻きこんだ帯状の原材料の真鍮板の束が置かれている。真鍮板展伸工は銅と亜鉛を調合して、



Fig. 84. 真鍮板展伸工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 81)

鑄造所内の熔鋳炉で原材料の薄板も作る。

下記文献参照

Chr. Weigel, *Abbildung der gemeinnützlichen Haupt-Stände. Regensburg* 1698. S. 317.

81v. 使丁

1462年、クリスの日の前の日曜日（12月19日）、ヴェネチア商人のメッセンジャーでもあり、亦城のメッセンジャーでもあった Kuncz Stirener 死す。165 番目の兄弟。（1462年の作画）。

16 v.（早稲田商学302号，p. 189, Fig, 24）の模写である。

82. ブリキ職人

1463年、聖オズワルドの祝日前の水曜日、ブリキ職人 Kunrat Eschenloer 死す。彼は18年の間、職人小評議会から任命された8人評議員の1人であった。166番目の兄弟。（1465年の作画）。

43 v. (早稲田商学305号, p. 174, Fig. 49) を大きくし, 左右を反対にした模写である。金敷の傍の小机に材料のブリキ板が積み重ねてある。

鉄の薄板を錫でおおったブリキはドイツの特製品であった。ブリキは表面の酸化を防ぐ為に鯨油や獣脂でおおった熔融錫の中に, 薄鉄板を浸して製作された。

### 82v. 皮なめし工

1464年, 聖トーマスの祝日前の金曜日(12月14日), 皮なめしやの Vlrich Peringer 死す。167番目の兄弟。(1464年の作画)。

34 (早稲田商学305号, p. 161, Fig. 39) の模写。

### 83. 荷馬車の馭者

1464年, 聖女オディリアの祝日前の晩(12月12日), Hans Preunlein 死す。彼はスタインベック出身の馭者と自称していた。168番目の兄弟。(1464年の作画)。

32 v. (早稲田商学305号, p. 158, Fig. 37) の荷車を, 何も積んでない箱型荷台に変えただけの下手な模写である。今馭者はながえの可動部分; 横木の工合を注意深く見ている。車のながえに回転出来るようにゆるく鋳留めされた横木がある。この横木に馬の引き綱が結びつけられていて, 荷車が牽引されるのである。このような横木の出現は13世紀になってからである。これによって多少安定して車の進行方向を変えることが出来るようになったが, まだ不十分で, 転覆の恐れはあった。自由に, 安定して方向転換が出来る為めには, 車台に固定されていた車軸を, 自由に回転出来るボギー車にすれば良いのである。このような車は天才的な車大工であったケルト人により, 前1世紀頃発明されたのであったが, ヨーロッパで, この発明が理解され, 一般に使用されるようになったのは15世紀になってからのことだった。ニュルンベルクの荷車屋の歴史に関しては下記文献参照

Joh. Ferd. Roth, Geschichte des Nürnbergischen Handels. Tl. 4. Leipzig

1802. S. 353~356.

## 83v. 肉屋

Fig. 85

1465年、聖ペトロ・パウロ両使徒の祝日の土曜日（6月29日）、肉屋の Hans Enßlinger 死す。169番目の兄弟。（1465年の作画）。

肉屋は舟型の盤の中で一匹の豚をあおむけにして、大きなナイフで切り分けている。すぐ傍の長い台には、切り分けた豚の前足が置いてあり、その前の木桶には血が一杯入っている。屠殺用の斧と大きなナイフも見える。壁の棒には生ソーセージが掛けてある。肉屋は肘のわきを切り裂いてある長袖を上の方までまくり上げている。

中世ヨーロッパで最もよく食べた肉は、農家で飼育するのに最も経済的で手間のかからない羊で、次で豚であった。牛は農耕、運搬に欠かせない生産手段であったので口にすることは殆んどなかった。牛の腰肉1枚5ペンス、同じく



Fig. 85. 肉屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 83v.)

豚の場合4ペンスであった。因みに鯨が5〜6匹で1ペンスという状態で、肉の値段ははるかに高価なものであったことが分る。

#### 84. パン屋

Fig. 86

1465年、シモンとユダの日の前の日曜日（10月27日）、街頭のパン売りの Vlrich Galster 死す。170番目の兄弟。（1465年の作画）。

タイル舗装の街路に面した市壁に、既に設けられていたくぼみを店屋にしている。その丸弓形の窓に板を張り出して、うまさうな大きなパンの塊や巻きパン、とんがりパンを並べて売っている。窓の左右の石壁に取りつけた桿には8の字型ビスケットが掛け並べてある。

#### 84v. 剪毛工

1466年、聖ペトロがアンチオキアに教座を定めた記念日前の日曜日（2月16日）、布地仕上工の Kuncz Sigwein 死す。171番目の兄弟。（1466年の作画）。

布地仕上げ職人が、ラシャ布が天井から下げられている架台の傍に立ち、小



Fig. 86. パン屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 84)

さい手鉋で仕事をしている。織り上げられ、起毛されたばかりのラシャ布の表面は、繊維が不揃いに突き出ているざらざらした手ざわりである。剪毛仕上げ工はこのけばをバネ鉋で刈り込み、余分な毛を切り取って除き、平滑で手ざわりのよい布地に仕上げるのである。剪毛工の最も古い絵図は、フランスのセンス (Sens) にある墓石の浮き彫りに見られる。

剪毛工に関しては下記文献参照

Paul Brandt, *Schaffende Arbeit und bildende Kunst im Altertum und Mittelalter*. Leipzig 1927. Abb. 167.

A history of technology. Vol. 2. Oxford 1956. S. 215. Fig. 185.

技術の歴史(5) p. 142. Fig. 110. 筑摩書房 昭和38年5月

### 85. パン屋

### Fig. 87

1466年、聖女オデイリアの祝日前の金曜日(12月12日)、パンヤの Heincz Peuchlein 死す。172番目の兄弟。(1466年の作画)。



Fig. 87. パン屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 85)



兄弟館の制服の袖をまくり上げたパン焼き職人がパンこね槽のうしろに立って、小麦粉を混ぜ合わせている。パンこね槽がのっている台の上、槽にそって太い丸太が、槽がぐらつかないように差し止める為に横たえてある。台の前には取手のある木桶と大きな陶器のかめ（小麦粉用のものか？）が見える。背後の瓦屋根で覆われているパン窯の口からは、赤々と燃えさかっている炎が幾筋も燃え上っている。

パン窯の形は何世紀もの間殆んど変らなかった。粘土や煉瓦、石で造られた厚い円天井の卵形の室であった。この窯の内部で丸太や薪に火がつけられた。窯の石が充分熱せられた時、灰が掻き出され、次いで生パンが入れられた。生パンは初め高熱で熱せられるが、その後次第に温度が下ってゆくので、うまい工合に中まで焼けるのである。このやり方はパン焼きに必要な条件すべてに合致している自然な製法であった。

朝食に新鮮なパンを食べたいという欲求が、パンを夜中に焼いておく習慣を成立させていった。深夜から始まるこの仕事は中世末期から始まった。15世紀後半には夜のこの作業に細かい市条例が規定された。

### 85v. 肉屋

1467年、聖ニコラスの日の後の水曜日（12月9日）、肉屋の Fridrich Plecher 死す。彼は1426年から45年迄の間、職人小評議会の8人評議員の一人であった。亦7年間に亘りニュルンベルグ市の職人祭における肉屋組合のカーニバル踊りの宰領を務めた。173番目の兄弟。（1467年の作画）。

彼の肖像画である。彼は毛皮の縁飾りのある胴衣を着用し、刺しゅうされている飾り帯をしめた姿で画かれている。勿論兄弟館の制服としての頭巾を肩にかけている。右手には花冠の上に横たわる羊の彫刻のついた豪華な肉屋組合の権杖を捧げ持っている。彼の組合内での地位をよく示している図である。

### 86. 蹄鉄鍛冶屋

### Fig. 88

1467年、聖霊降臨祭前の水曜日（3月13日）、善良なる蹄鉄親方の Hans



Fig. 88. 蹄鉄鍛冶屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 86)

Pfaffenhoffer 死す。174番目の兄弟。(1467年の作画)。

蹄鉄工は兄弟館の制服に黒いベレ帽を被り前掛けをしている。前掛けには道具の一つである小さい環がぶら下げてある。彼は、傍の騎士がしっかり押えて差し出している馬の右後足の傷んだ蹄鉄の釘をヤットコで抜き去っている。馬は端綱ヘナズナを壁の鉤に結びつけられ、おとなしくしている。すぐにも乗り出せるように鞍をつけ、飾り立てられている。騎士は赤色の短かい胴着に、同色の房飾りのついた縁なし帽子で、長い柄の花車の拍車を装備した長靴という出て立ちである。床上には古い蹄鉄と馬の蹄ヒヅメを削り取る道具、そして先をふたまたに割ってあるハンマーがおかれている。

蹄鉄鍛冶は、寸法も計らず、蹄を詳しく調べもせず、ただ馬を2・3回彼の前を引いて通りすぎるだけで完全な蹄鉄をつくることが求められる、という難かしい親方試験に合格しなければならなかったという。

86v. 大工

Fig. 89



Fig. 89. 大工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 86v.)

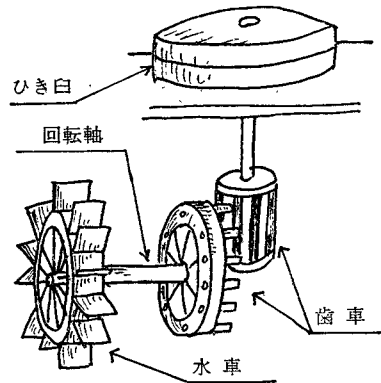


Fig. 90.

1468年、聖バルプルゲンの日の前の木曜日（4月28日）、大工 Wild Engelhart 死す。175番目の兄弟。（1468年の作画）。

大工が木の台に固定されている4本幅（スポーク）の車輪の外縁（リーム）を手斧で荒削りしている。その奥には同じ様に木の台に固定されている水車の水輪がある。さて水車の水輪に図のように回転軸を固定した後で、水輪に並べて、外縁側面に木製の歯をはめこんだ車輪を固着する。そしてその上部に、幅の小さい歯車をかみ合せて製粉所のひき臼を運転させるのである。（Fig. 90 参照）

中世に入ってから水車が強力で活動するようになった。そしてどの大工も水車建造が出来なければならないものとなった。

### 87. 甲冑磨き工

1469年、元旦（1月1日）、甲冑磨きの Hanns Derrer 死す。176番目の兄

弟。(1469年の作画)。

7 v. (早稲田商学302号, p. 182, Fig. 15) の左右を逆にした模写である。

87v. カバンの口金・<sup>クチガネ</sup>・<sup>トメガネ</sup> 釦金作り

1469年, 聖ヤコブの日(7月25日), Peter Islinger 死す。彼は鞆の真鍮口金やバックルの製作者であった。177番目の兄弟。(1469年の作画)。

釦金作りは万力の上で, 真鍮製の財布締め金にヤスリをかけている。万力は 12 v. (早稲田商学302号, p. 186, Fig. 19) と同様のもので, 仕事台に固定してある。

この職業に関しては

Chr. Weigel, Haupt-Stände, S. 359 参照

### 88. 金細工師

1469年, 聖ロレンツの祝日後の土曜日(8月12日), 金細工師 Niclos Vogelesteiner 死す。178番目の兄弟。誠実な人物であった。(1469年の作画)。

3本脚の腰掛けに座して, 金敷の細口の縁で, 金で縁飾りした銀鉢を叩いている。机上には蓋を外した華麗な酒杯と青色の宝石のついた指輪がある。51. (早稲田商学305号, p. 181, Fig. 56) と同様の図である。

### 88v. 旅亭の主人

### Fig. 91

1470年, 聖パウロ回心の祝日前の火曜日(1月24日), 旅亭の主人 Jorg Starcz 死す。179番目の兄弟。(1470年の作画)。

板張りの天井, 開けはなたれた窓, 旅亭の客室の様子が遠近画法で描かれている。画面中央を横切って, 真白なテーブルクロスを掛けたテーブルが置かれている。その上に焼いた鳥肉と, つけ合せの野菜を盛った料理皿と, 2枚の小皿, そして切り分けたパンがある。

テーブルに沿って四人の男達が座している。テーブルの向う, 壁側の三人のうち二人は縁のある赤い帽子を被り, 一人は縁なし青色帽子である。ナイフとコップが見られるが, フォークはない。テーブル手前右側の長いブロンドの髪



Fig. 91. 旅亭の主人  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 88v.)

の若者は、短かい胴衣で、拍車のついた巖丈な長靴をはいている。長靴の上辺は折り返されている。左側に旅亭の主人が立っている。取手のある蓋のしたる容器を下げ、太くて短かいガラスのコップを差し出してサービスに務めている。彼は灰色縁なし帽子を被り、兄弟館の制服を着用し、財布を下げたベルトを締めている。床上には酒を冷やすタライ桶が置いてあり、中に吊し紐のついた大きなフラスコが入れてある。

この当時、食卓は室に常時置かれていたのではなく、食事の都度運び込まれ組立てられた。A字型をした脚のウマ、或いはX字型に組んだ脚立の上に大きな板をのせて出来上った。そして食事が終わるとすぐ分解して片付けられてしまった。亦食卓は壁ぎわに設置され、人々は壁側に沿って並び、座った。室の中央側の部分は給仕用に空けられていた。中世の室内は殆んど何も家具のない状態が普通で、腰を下ろす為には壁ぎわに作りつけられているベンチ（石製のも

のも、木製のものもあった)か、長持の上か、そうでなければ床上に敷いたクッションに座すしかなかった。従ってこのように椅子が固定されているので、テーブルの方がそれに合せて動いたわけなのである。1490年頃からようやく椅子が大量に使用されるようになったので、今度は食卓が壁ぎわから離れて室の中央に置かれるようになった。そしてホスト・ホステスが向い会って座して宴を張ることが出来るようになったのである。

食卓にはフォークもスプーンもナプキンも無かった。ナイフだけが、それも一本置かれているだけだった。フォーク、スプーン、ナプキンが一般に使用されるのは18、19世紀になってからである。料理は指を使って食べられた。よごれた指はその都度床に届くほど長いテーブルクロスでふきとられた。従ってひどく汚れるので、豪華な宴席になると料理の変るたびに取換えられたという。食時には男性は長い髪の毛がスープに落ち込まないように帽子を被るのが慣わしであった。亦食事には1本のナイフが廻されて使われるので、各自が自分用のナイフを持参するのがマナーにかなうこととされた。

### 89. 馬具師

### Fig. 92

1470年、四旬節の日曜日(3月11日)、馬具師 Ulrich Schwab 死す。180番目の兄弟。(1470年の作画)。

仕事台のうしろに立って首輪を作っている。その傍に鐙のついた鞍がある。亦壁の桿には革帯と幅の広い首輪がかかっている。

かじ棒や引き綱、引き革が胸帯の中央部に取り付けられるようになった時、腹帯の索引具としての役目(早稲田商学305号, 32 v. p. 158参照)は終わった。そして亦胸帯は首輪へと発展した。首輪の出現は10世紀の頃で、更に12世紀に入ると芯の入った近代的牽引具に完成するのである。

騎手が安定した姿勢で馬に乗り、戦場で充分に戦うことが出来る為めには、しっかりした鞍と鐙を必要とした。鐙は人手を貸りたり、ふみ台を用いなくとも馬に乗ることが出来て便利なものであるが、それ以上に、戦場で疾走する馬



Fig. 92. 馬具師  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 89)

上から刀を振り廻したり、両手で弓を射る時になくてはならないものだった。足をふんばり体を固定することが出来ないと転落してしまうからである。鎧は中央アジアの騎馬民族により発明されてヨーロッパに伝えられたものと思われる。

鞍は騎手の腰や尻を快適に支え、しっかりと固定する為の馬具である。亦馬上から短槍を投げたり、長槍で刺突する際の反動・衝撃の為に騎手が後方に突き落される危険を防ぐ為のものであった。従って鞍尻を高くして臀部を支えるように作られている。鞍は馬の腹にめぐらされた腹帯でしっかりと取りつけられる。このような鞍は前6世紀スキタイ人やサマルチア人によって発明され、ケルト人によって前4世紀にローマ人に伝えられた。

#### 89v. 真鍮板展伸工

1471年、3月4日、真鍮板叩きの Heincz Swartz 死す。181番目の兄弟。(1471年の作画)。

81 (本誌, p. 271, Fig. 84) の模写である。

### 90. 真鍮器具鋳型工

1471年, 聖マドレナの祝日の前の晩の日曜日 (7月28日), 真鍮鋳型工の Jokob Mulner 死す。182番目の兄弟。(1471年の作画)。

鋳型工が仕事台に向って燭台の鋳型組立に没頭している。彼の前には3本の蠟燭立が付いている三腕燭台と, 尖った針が突き出ているローソク台が置かれている。それらの間には鋳型製作用の粘土のかたまりがある。鋳型工は粘土, 砂, そして繊維のけば (これに関しては Christoph Weigel, *Abbildung der gemeinnützlichen Haupt-Stände. Regensburg 1968. S. 325. 参照*) を調合して, 真鍮細工人が注文する鋳物鋳型を作る。柔かい鋳型用粘土に, 油を塗った木型を強く押しつけて鋳型が作られる。そしてこれらの数個の部分品から鋳型が組み立てられてゆくのである。

### 90v. 剪毛工

### Fig. 93

1472年, 四旬節第三主日の前の土曜日 (2月29日), 剪毛工の Haincz Herczog 死す。183番目の兄弟。(1472年の作画)。

剪毛工は作業台のうしろに立ち, 台の板面に拵げられた布地を, 大きなばね鉞で刈り込んでいる。布地は四箇所, 押へ鉤 (真鍮製クランプ) で板面に固定されている。彼は鉞の下刃に付いている鐙状の革バンドに左手首を挿し込み, 左手の指を上刃にかけて刃を動かして刈り込んでいる。右手で鉞を自分の身体にあてがって, ふらつかないようにしっかりと固定している。細かく刈り込む時には, 下刃に鉛の錘りを載せたりした。普通二人で並んで一緒に仕事をした。クランプで押えた面積部分の刈り込みが終ると, クランプをはずして先に送った。そして剪毛台前下方部に置かれた低い格子状台に折り重ねられた。剪毛と起毛 (早稲田商学302号, 6v., p. 181, Fig. 14 参照) は交互に, 望みの平滑さになるまで何回も続けられた。84v. (本稿 p. 275) と違って, 生地を垂らして作業するのでなく, 剪毛台上で行うのは中世後期になって始められた方式であ





Fig. 93. 剪毛工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 90v.)

る。この方式は鋏を改良しながら19世紀まで続けられた。しかし骨が折れ、時間のかかる作業であったので種々機械化が試みられた（レオナルド・ダ・ヴィンチの考案のような）が、19世紀までは解決されなかった。

作業室の天井は板張り、後は丸弓形の窓が2箇所開いている。窓の傍に白墨で書いたメモが見られる黒板が下げてある。室の間仕切りは丸弓形の枠縁で、その縁にもう一丁の大きな剪毛鋏が下げられている。

### 91. 給仕長

1472年、聖女クニグンデイスの祝日前の月曜日（3月2日）、Haincz Haß 死す。彼は元は召使いであった。184番目の兄弟。（1472年の作画）。

ソフト帽を被り兄弟館の制服を着た給仕長の帯革には大きな鍵が1個下がっている。左手でジョッキを、右腕にパンを3個かかえて運んでいる。うしろに霧除庇のある地下食料庫の開いている入口がある。そこに2本の酒桶と壁ぎわ

天井に近い柵に何個かのパンの塊が見える。地下食料庫屋根の上部にはのこぎり壁の蛇腹飾りがある。

焼きたてのパンはまだ領主・貴族等の特権階級に限られていた（本稿，85. p. 277参照）。一般にはパンは週に一度焼くか，亦は一週間分まとめて買うかして，天井近くの柵に貯えた。何日か置かれたパンは，焼きたてよりもずっと腹もちがよく経済的であると考えられていた。

#### 91v. 短剣作り

1472年，ミカエル大天使の祝日前の日曜日（9月27日），短剣作りの Wenczel 死す。185番目の兄弟。（1472年の作画）。

短剣作りは兄弟館の制服を着て，縁を折り返してある粗毛製の帽子を被り，仕事台に向っている。左手で砥石を台に立てて短剣を研いでいる。12 v.（早稲田商学302号，p. 186, Fig. 19）参照。

#### 92. 皮なめし工（白なめし）

Fig. 94



Fig. 94. 皮なめし工（白なめし）  
（Amb. 317.2°, Bd. I, 92）

1473年、パウリ回心の日の後の火曜日、皮なめし工 Fricz Egon 死す。186番目の兄弟。(1473年の作画)。

皮なめし工は、兄弟館の制服の腕を高くまくり上げて仕事に励んでいる。皮なめし用削り台に広げた獣皮を、左右に握柄のある刃のない毛削り刀でこすり脱毛している。左側には何枚かの獣皮を漬けた皮なめしの木桶がある。

皮なめし工、特に白なめし工は雌・雄の鹿、かもしか、雌羊、雌やぎの皮の加工が殆んどである。これらの皮は先づ第一に毛が脱けやすくなるように石灰浸液に浸される。石灰は生皮を膨潤させて、なめし剤の浸透を容易にするのである。鞣皮剤としては、明ばん、食塩、或いは脂鞣用に脂肪や油が使用される。34 v. (早稲田商学305号, p. 161, Fig, 39 参照)

革でなく毛皮を作るには、毛のついた生皮を枠に張って、明ばんと食塩の溶液を海綿につけ、生皮の肉のついている面を何回も浸してなめすのである。

#### 92v. 鎖帷子作り

1473年、聖母マリアの聖エリザベート御訪問の祝日後の日曜日（7月4日）、武装作りであり、兵士でもあった Seycz Han 死す。187番目の兄弟。(1473年の作画)。

10 (早稲田商学302号, p. 183, Fig. 16) を左右逆にした模写である。

#### 93. 財団理事者

1473年、聖ゼバルドゥスの祝日前の金曜日（8月13日）、Paulus Volckamer, 12人兄弟館とカルトジオ修道院の理事者となった。そして1486年、聖ペトロの鎖の祝日前の土曜日（7月29日）、理事を辞す。彼が12人兄弟館の理事を務めていた期間に21人の兄弟が死亡した。(1473年の作画)。

Paulus Volckamer (理事在任期間1473~86, 死亡1505年) と Magdalena (旧姓 Mendel) の夫妻は、斜に画かれている祭壇の前で、右の方を向いて跪き祈っている。祭壇の上面は敷物で覆われていて、錫製の燭台が左右に1本ずつ置いてある。祭壇上面奥には段があり、その段の正面にはキリストとその

12使徒が画かれている。そしてその上にきらきらと輝いた三折祭壇が置かれている。三折祭壇中央部にマリアとヨハネを左右に控えた十字架上のキリスト、左翼にマグダラのマリア、右翼に聖女バルバラの像が画かれている。

理事者は長い毛皮のマントを着ている。夫人は明るい緑色の襟なしの長いコートをはおり、流行のボンネットで頭を包んでいる。そして長い、大粒の赤色真珠のような数珠を手にかけている。2人の足もとには Volckamer 家及び Mendel 家の紋章が画いてある。

### 93v. 靴屋

1474年、聖ペトロ、アンチオキアに教座を定めた日（2月22日）に靴やの Petter Velner 死す。188番目の兄弟。（1474年の作画）。

靴屋の店内を見てみる。仕事場は花卉彫刻の柱頭を持つ両側の柱と、その上部に三葉形の狭間飾りのある三角小間を持つ丸弓形の豪華な枠のある部屋である。正面奥には大きく陳列窓が開いている。そこには商品の靴が2足並べてある。壁面左上には靴の木型が、窓下には数珠がかけてある。肘掛けのある立派な椅子と、支脚に立派な飾り彫りのされている仕事机が置いてある。半月形裁断包丁が、材料革と1足分の靴底が並べてある机の上に突き立ててある。靴やは椅子に座して、皮紐で脚に巻いて結びつける農民靴（ブントシュー）を仕上げている。手にしているのは湾曲した革切ナイフである。

### 94. 酒屋雇人

### Fig. 95

1474年、聖キリアヌスの日の前の火曜日（7月5日）、酒屋手伝いの Kuncz Kastner 死す。189番目の兄弟。（1474年の作画）。

酒屋手伝いが酒蔵入口のアーチのすぐ傍に立ち、ブドー酒を一つの樽から別の樽に移し入れている。双方の樽底の飲み口にホースを差し込み連結した上で、一方の樽の側面にある小さな四角形の注入栓孔に鞆を挿し込んで押し流すのである。片手で鞆を操作出来るように、鞆の下面の取手と樽のふちをくさび金具で留めている。残る片手は真鍮製コックを握っている。



Fig. 95. 酒屋雇人  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 94)



Fig. 96. 真鍮板板金工  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 94v.)

#### 94v. 真鍮板板金工

#### Fig. 96

1475年、聖母お潔めの祝日（2月2日）、真鍮皿作りの Hanns Hoffman 死す。190番目の兄弟。（1475年の作画）。

板金工が店の前の舗装された路上で、真鍮薄板を叩いて水盤を作っている。真鍮の円板を、皿や鉢の型に作ってある鉄製の雌型にのせて、板金用ハンマーで真鍮を叩いて型通りに作っていくのである。更にこうして叩き出された製品に浮き彫り装飾模様をほどこすのであるが、これはピッチを満たした容器の中に入れて、外側をピッチで固め、しっかり支えてから、内側から模様を打ち出してゆくのである。或いは模様が彫り込んである鉄の雌型に入れて、その模様通りに静かに打ち込んでゆくのである。14世紀以後になると可成り大きな製品も作られるようになった。これらの製品は果物を盛ったりするが、装飾品として壁に飾られることが多かった。ドイツ各地で制作されたが、特にニュルンベルクでは大変に盛んで、世界中に輸出し、有名であった。

店内には角材を組んだ平らな天井にそって棚があり、種々な大きさの皿が並べてある。

板金工に関しては下記文献参照

F. Fuhse, *Schmiede und verwandte Gewerbe in der Stadt Braunschweig*, Leipzig 1930. S. 66.

### 95. 料理人

### Fig. 97

1475年、恒例の聖遺物（キリスト磔刑の槍と釘）拝観日直後の月曜日（4月10日）、長い間教区のロレンツ教会の料理人であった Wilhelm 死す。191番目の兄弟。（1475年の作画）。

前掛けをして、ベルトに小刀を下げている料理人が、火にかけた土製の壺を攪拌している。そして左手で燃え上っている火の中へ薪を押しやっている。火のそばには同じような壺が更に3個も立て並べてある。かまどの上にはつるべのある鍋が吊り下げられているし、前には壺と両側に取手のある桶が置いてあ



Fig. 97. 料理人  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 95)

る。かまどは平らな石製の台で、むきだしの炉火の簡単な型式のものである。

#### 95v. 短剣作り

1476年、キリスト受難の日（4月12日）、ナイフ作りの Linhart Lebenbrüst 死す。192番目の兄弟。（1476年の作画）。

68（本稿，p. 255）と同一の図である。

#### 96. 靴修理屋

#### Fig. 98

1476年、聖女バルバラの祝日後の月曜日（12月9日）、古靴直しの Ott Norlinger 死す。193番目の兄弟。（1476年の作画）。

蝶番で継である二枚の板を折り重ねて机面とし、飾りのある支脚をくさびで貫<sup>ヌキ</sup>と固定した立派な仕事机がある。古靴直しは、三本脚の腰掛けに座し片足を机の脚にかけ、木型の入っている靴を両膝の間で押えて仕事をしている。机上にある突き錐は、縫い合せ部分に針を通り易くする案内孔の針目をあける為のものである。そして靴の内外両側から2本の縫針を通し、縫糸をしっかりと引



Fig. 98. 靴修理屋  
(Amb. 317.2°, Bd. I. 96)

っ張って縫い合わせていくのである。縫い糸は亜麻糸か麻糸を用い、引き易くし、丈夫にするため樹脂蠟を塗ってある。机上の底革の前に小さい穴がいくつもあいている木片があるが、これは何枚かの底革を重ねてその縁の部分の縫い合わせる為に力を入れて案内孔を突き刺す時、膝の上に置くあて木である。

#### 96v. 召使い

1478年、枝の主日の前の水曜日（3月11日）、Heintz と呼ばれる召使いの兄弟死す。194番目の兄弟。（1478年の作画）。

ベルトに大きな鍵 2 本とナイフ 1 本を吊げた召使いが、長柄のそだ帚でタイル張りの床を掃いている。建物は両端に階段状の切り妻を持った石造りで、赤瓦の小さい煙出し屋根で覆われた天井窓がある。部屋の三方にはブッチェン・ガラスの窓があり、壁にそってぐるりと長椅子がめぐらされている。

#### 97. 桶屋

1478年、聖ヴィトウスの祝日前の木曜日（6月11日）、桶職人の兄弟死す。彼はかつて12使徒小聖堂の寺男であった。195番目の兄弟。（1478年の作画）。

11 v.（早稲田商学302号，p. 185，Fig. 17）と同様である。桶屋のうしろに削り台（Fig. 99）が見られる。この削り台は、板をしっかりと押えておいて削る道具で、指物師や其の他種々の処でよく使用されている。万力の類である。

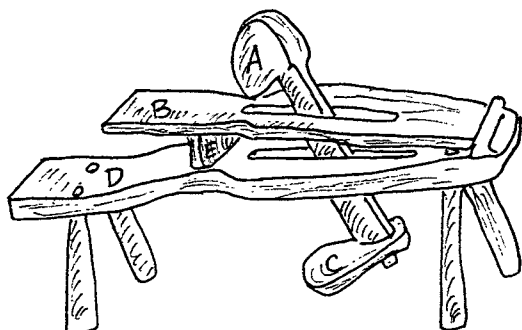
#### 97v. 紐づくり

#### Fig. 100

1480年、昇天祭の日の後の日曜日（5月14日）、Hanns Holfelder と呼ばれた紐づくり死す。196番目の兄弟。（1480年の作画）。

支柱の上部に円盤の回転軸を有する装置が 2 個並べて置いてある。その間にベンチを置いて紐づくりが腰かけている。左側の装置の円盤表面には 4 本の鉤が固定されている。あらかじめ作ってあった 4 本の素紐<sup>アラヒモ</sup>（16 v.，早稲田商学302号，p. 188，Fig. 23. 参照）を、各々この鉤に引っかけて、右側の装置の円盤中心にある 1 本の鉤まで引っ張り、1 個所にまとめる。左右の円盤の速度を違えて、ゆっくりと互に反対向きに（例えば右手で右廻し、左手で左廻しする）





工作人は(D)にまたがって腰を下ろし、(A)と(B)の間に板をはさみ、片足で(C)を強く踏みつける。板は(A)(B)にはさまれて固定される。  
Fig. 75 を参照されたい。

Fig. 99. 削り台



Fig. 100. 紐づくり  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 97v.)

回転すると、4本のひもは各々が同じようによられながら、更に1本の紐により合されてゆき丈夫な紐が出来上るのである。この図は残念ながら、不正確な描写であるので、作業の本当の様子を知る事は出来ない。この方法では出来る紐の長さは装置の間隔で決まってしまう。そして連続的に長い紐を作ることが出来ない。部屋の壁には出来上った紐が玉にまかれ或いはそのままの状態下げられている。

### 98. パン屋

1480年、聖霊降臨祭前の水曜日（5月17日）、Bozen の Hanns と呼ばれたパン屋死す。197番目の兄弟。（1480年の作画）。

長い兄弟館の制服を着たパン屋が、パン窯から4本の尖りパンを木製シャベルにのせて取り出している。

パンは外皮が堅く、内部はほどよく充分に焼けていなければならなかった。堅い外皮は多くの人々に好まれた。風味が良いばかりでなく、時間をかけてよく噛み砕いて食べるので腹もちもよかったからである。亦パンが傷ついたり、ひからびたりするのを保護する役目も果たした。パンの内部まで熱が通りやすくしかも固い外皮が出来やすくする為め、パンの表面積を拡げる工夫が種々となされ、17世紀、バロック時代の頃になって、引き伸ばされた外皮の広いパンが現れた。このようなパンを焼くことにかけてはイタリア人の右に出るものはなかった。

### 98v. 荷下ろし人夫

### Fig. 101

1481年、聖アントニウス祭の後の木曜日（1月18日）、Vlrich Windysch 死す。彼はブドー酒取引場の荷扱人夫であった。198番目の兄弟。（1481年の作画）。

図中斜めに置かれている、はしご枠で囲まれた荷車上にブドー酒樽が2本っている。この荷台から荷下ろし人夫が、綱を2本かけた樽を、樽運び用滑り枠を用いて下ろそうとしている。綱はすべり落ちようとする樽にブレーキをか



Fig. 101. 荷下ろし人夫  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 98v.)

けたり，種々と操作する為のものである。人夫の腰にはナイフが下がっている。

### 99. 鳥刺し

### Fig. 102

1481年，使徒パウロ回心の日の後の土曜日（1月28日），鳥刺し Paulus 死す。199番目の兄弟。（1481年の作画）。

鳥刺しは森の中の隠れ小屋の中にひっそりと腰かけて，小脇にかかえこんだ捕鳥機を，右手で支え，差し出して，じっと待ち続けている。捕鳥機は長い棒に割れ目を入れて，その間にカスガイを挿し込み，割れ目をひろげてあるものなのである。カスガイは細紐に結ばれていて，その紐の端しは鳥刺しの左手に握られている。鳥が捕鳥機の棒に留ると，頃合をはかって，すばやく細紐をひき，カスガイを外して鳥の小さい脚，或いは頭，羽根の部分の割目にはさみつけて捕えるのである。

囿中，森の中を飛び廻っている鳥や，留まっている鳥達は，すずめ科やしじゅうから，あとのりの類のようである。小鳥に関しては



**Fig. 102.** 鳥刺し  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 99)

Joh. Geiler von Kaysersberg, Brösamlin. Straßburg 1517. Blatt 91 a.

鳥刺しに関しては下記文献参照

Kurt Lindner, Die Jagd im frühen Mittelalter. Berlin 1940. S. 306~307 und Taf. 42, 43 und 74a.

**99v.** 貴族（ドイツ帝国教区会長を勤む。）

1481年、枝の主日の前の金曜日（4月13日）、貴族 Paulus Voytt 死す。彼  
は一時 Egloffstein 城の Sigmund 二世の下で、ニュルンベルグの教区会長  
として奉仕した。次いで当市の市民となった。200番目の兄弟。（1481年の作  
画）。

彼は数珠を手にして、右手にある礼拝堂に行くところである。礼拝堂は丸弓  
形の窓と入口、その入口の上部には小さいばら模様の装飾がある。切妻赤瓦屋  
根の上には十字架が立っている。左手後方には城が見える。はざま胸壁の城壁  
に囲まれている城内には、高い見張りの円塔や、階段状の壁面の木骨切妻構造

の家が建っている。礼拝堂と城の間には、青い山脈が見え、谷川が山を縫っている。

### 100. 真鍮板展伸工

1481年、聖大ヤコボの日の後の土曜日（7月28日）、真鍮板叩きの Petter Rudel 死す。201番目の兄弟。（1481年の作画）。

仕事部屋はタイル張りで、波形瓦の屋根、階段状の切妻の建物の中にある。部屋の奥には十字枠の入った格子窓がある。仕事も道具も 81（本稿 p. 271, Fig. 84）と全く同様である。

### 100v. 荷担人夫

### Fig. 103

1482年、聖アントニウスの日の前の土曜日（1月12日）、Heincz Weycker 死す。彼は長い間運搬人であった。202番目の兄弟。（1482年の作画）。

荷担人は背中に負った袋に2重に綱をかけて、両手でしっかりと掴んでいる。そして階段状切妻壁、丸弓形の玄関口に通ずる階段の最下段に足をかけて



Fig. 103. 荷担人夫  
(Amb. 317.2°, Bd. I, 100v.)

いる。タイル張りのロビーと、その片隅の明りとり窓が入口からちらっと見える。

(1984. 9. 2)

(解説に際して参照した参考文献は、一々挙げることを避けて、一括して記載することにした。)

参考文献

- (1) Das Hausbuch der Mendelschen Zwölfbrüder Stiftung zu Nürnberg. Deutsche Handwerkerbilder des 15 und 16 Jahrhunderts. Herausgegeben von W. Treue u. v. a. Bruckmann München.
- (2) Korl Fischer, Register zu den Mendelschen Zwölfbrüder Büchen der Stadtbibliothek Nürnberg.
- (3) 12 Werkstätten von handwerkern. Verlag J. F. Schreiber. Esslingen.
- (4) Büttner werkstatt. Mainfränkische museum Würzburg.
- (5) Gerhard Dietrich, Möbel. Bildführer Kunsthandwerklicher Techniken. Heft. 1. Kunstgewerbemuseum Köln. 1981.
- (6) Fritz Winger, Du Mont's Lexikon der Möbelkunde. Du Mont Buch verlag Köln. 1982.
- (7) A History of Technology. Vol. 1, 2. Edited by C. Singer. etc. Oxford at the Clarendon Press.  
技術の歴史, 平田寛編訳 第3, 4, 5巻, 筑摩書房 昭和39年
- (8) キリスト教用語辞典, 小林珍雄, 東京堂 昭和39年
- (9) 技術文化史(上), T. K. Derry & T. I. Williams, 平田, 田中訳, 筑摩書房 1971.  
9
- (10) 西洋事物起原, I, II, III ヨハン・ベックマン, 特許庁内技術史研究会訳, ダイヤモンド社 昭和55年
- (11) ドイツ美術展, 中世から近世へ, カタログ, 国立西洋美術館 1984.7
- (12) 機械化の文化史 S.ギーディオン, 栄久庵祥三訳, 鹿島出版 昭和52年
- (13) 騎行・車行の歴史, 加茂饒一, 法大出版 1981.3
- (14) 西洋家具文化史, 崎山 直, 小夜子, 雄山閣 昭和50年
- (15) 英国建築物語, ビューブラウン, 小野悦子訳, 晶文社 1980.10
- (16) 中世への旅・騎士と城, H. プレティヒャー, 平尾浩三訳, 白水社 1982.11
- (17) 同上, 農民戦争と傭兵, 関楠生訳, 同上 1982.7
- (18) 同上, 都市と庶民, 関楠生訳, 同上 1982.9
- (19) 中世を旅する人々, 阿部謹也, 平凡社 1980.4

- (20) ヨーロッパ中世経済史, J. クーリッセル, 伊藤・諸田訳, 東洋経済 昭和49年
- (21) 中世ヨーロッパの生活, J. ドークール, 大島誠訳, 白水社 1984. 1
- (22) 中世ヨーロッパ都市と市民文化, F. レーリヒ, 魚住, 小倉訳, 創文社 昭和57年
- (23) 中世の森の中で, 堀米庸三編, 河出書房新社 昭和58年